

## *Ulysses* の第 10 挿話：中心の迷路

永原和夫

*Ulysses* の昼間の展開が終り夜の劇が始まる折り返し点に、Joyce は一つの迷路を置いた。1918 年 New Year's Eve の日付がある第 9 挿話の自筆原稿の最後には “end of first part of *Ulysses*” と書かれている。この第 10 挿話ではじめて、そしてこの章でのみ、われわれは Stephen Dedalus と Leopold Bloom の意識の洞窟から抜け出して、彼等を時間と空間の中で見る機会を与えられる。この前後の章と全く関係のない短い “*entr'acte*”<sup>1)</sup> で、二人の主人公の精神の遍歴は一端休止し、それまで彼等の意識のひだに潜んでいたダブリンが、血液がよどむ午後 3 時になってはじめて、表面に出てくる。そこには Stephen と Bloom だけでなく、実に多くの人々の往来があり、これら市民の生活を内と外から見せてもらうのもこの挿話が最初で最後である。しかしこの挿話の主人公は Stephen または Bloom, あるいは市民のだれかではなく、建物が並び道路が交差するダブリン市自体である。Joyce はこの挿話のモデルに Odysseus でさえあえて通るのを避けた “Wandering Rocks” を選んだ。アジアとヨーロッパの両岸にはさまれた海狭に浮かぶ大小の島々はその早い潮に岩もぶつかり漂い、そこを通り得たのは金の羊毛を求めた Jason の船団のみだったという。Joyce がダブリンの地図の上に作った陰険な人工の迷路を解くことによって、内に隠された意味も分かるかもしれない。

Joyce は激しい憎悪を持って棄てた町に限りなくとらわれていた。書くことは悪魔払いの一種である。しかし彼は書く度にその中に一層強く引き込まれて

---

Text には The Modern Library, 1961 を用い、reference は本文中にカッコでページと行を示した。

1) Joyce's letter to Frank Budgen, Stuart Gilbert (ed.), *Letters of James Joyce*, I (London, 1957), p. 149.

いった。自ら追放者となった Joyce がこの町を精神的に所有しようとする彼の欲求がどんなに強かったかということは、いくら強調しても十分ではない。彼が時に感傷的とも思えるほど故郷の町の街路と商店、音と臭いの思い出を大切にしていたかは、多くの人が証言している。新聞、チラシ、住所録、電車の切符、ダブリンのもので持ってこれるものならどんなものでも集めた。Joyce と彼の故郷との関係が単なる個人的な愛憎並存感情の現われにすぎないのなら、批評にかかわりのない伝記的事実とみなすこともできよう。しかしそれは *Ulysses* の構造と意味とのきわめて重要な一要素である。この書物には古い新批評では完全に処理しえないものがある。

*Ulysses* の舞台は Joyce 自身が住んでいた実際の歴史的な状況にその根をもっている。それはこの書物の多くの意味を完全に理解しようとするなら知らずにすませない具体的な現実である。このことは“Wandering Rocks”についていくら強調しても強調しすぎではない。なぜならジョイスはこの章で、都市はありのままに描けば迷路になるという単純な原理を極限までつきつめたからである。見取図が理解しやすいのは概念的な省略だからだ。すべてを具体的に書けば見通が失われる。この章にはすべての町と同じように危険な袋小路が待ちうけている、自分の居場所が分からなくなり、絶えず方向転換をせまられる。事実は予想を裏切り、作中人物の多くが幻想や挫折に悩まされている。彼等にとってダブリンは真の接触を欠いた失意とごまかしの町である。Artifoni と Dignam 少年は電車に乗り遅れる。Kernan は騎馬行列を見そこなう、銅像はだしぬけに生まれを命じ、電話がやかましく耳もとで鳴る、ボクシング試合への招待は期限が切れている、かまどの鍋はシャツを煮ている。しかしアルゴ一船の一行の真似をして危険な想像の航海に乗り出さなければならないのは読者なのだ。

Joyce はダブリンがもし灰燼に帰したら *Ulysses* によって再建できるといったと、Frank Budgen が伝えている<sup>2)</sup>。Joyce がその比類ない記憶力と友人、

2) Frank Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses* (Bloomington, 1960), p. 67.

縁者にたのんで取り寄せた故郷の様々な記念品、そして *Thom's Directory* から丹念に作りあげたダブリンは<sup>3)</sup>、同国人を憤慨させたと同時に、Shane Leslie のような人に、じゃが薯を食べカトリック教会の伝統で苦しんだダブリン生まれの者でなければ *Ulysses* は分からないという妙な自負を抱かせた<sup>4)</sup>。ここには実に多くの道路、広場、商店、酒場そして市民が実名で具体的に記述されているのだが、19世紀小説の一般的な特徴とされている写実的な描写はほとんどない。場景を絵画的に描く代りに Joyce は名前をあげる。Joyce の意識の流れの小説では Richmond street (221.5), Crampton court (232.32), Rabaiotti's icecream car (225.16), Shackleton's offices (239.15), Ruggy O'Donohoe's (250.20) といった名前だけで十分私的な連想を刺激する喚起力を持ち、実際に町を歩いている印象を読者に与えることができる。Baird 石材工場 (614.20) のそばを通ると Stephen はかつての彼の英雄 Ibsen を思い出すし、Ceppi 商会の飾り窓の油絵 “virgins, bright of their oils” (260.38) は Bloom をロマン的な気分させ彼の性欲を刺激する。一般的にいて、Bloom の心は外界を映す鮮明な鏡であるのに対して、Stephen は常に感覚的印象を冥想と内省とで屈折させる。Stephen が Russell 宝石店を見ているのを述べる凝った文章は、彼の意識の特徴をはっきり表わしている。

Stephen Dedalus watched through the webbed window the lapidary's fingers prove a timedulled chain. Dust webbed the window and the showtrays. Dust darkened the toiling fingers with their vulture nails. Dust slept on dull coils of bronze and silver, lozenges of cinnabar, on rubies, leprous and winedark stones. (241.23)

Stephen は暗示、前兆、突然のエピハニーを求めて対象を無視するとしたら、

3) Joyce の *Thom's Official Directory of the United Kingdom of Great Britain and Ireland* (Dublin, published annually) の利用については、Clive Hart and Leo Knuth, *A Topographical Guide to James Joyce's Ulysses* (Colchester, 1975), Part 1, pp. 13-21 に詳しい。

4) Robert H. Deming, *James Joyce: The Critical Heritage*, Vol. I (London, 1969), p. 232.

Bloom はあまりにやすやすと対象と一つになるので、彼の思考を周囲の地勢から切り離すのが困難である。彼等の心の中に入って意識の流れをたどっているうちは、われわれは実際のダブリンを当然のこととみなしていた。しかしこの章で一旦彼等の意識の外に出て、この町を一人歩きさせられるとたちまち途方に暮れてしまう。

Joyce はこの町について説明的な描写を加えることはまったくくないが、どんな自然主義の作家より克明にこの町を描いている。Richmond street は“Araby”の少年が Mangan の妹を待って行んだ道路で、奥にキリスト教救貧学校があり、気違い女がかん高い声をあげていた。この章で Conmee 神父は Richmond street から出てきて“untidy caps”をとった小学生たちに寛大に挨拶を返すが、彼の心に残った印象は“Christian brother boys”だけである。断章 3 でからだをゆすりながら Eccles street を歩いていく一本足の水兵が、シャツ姿で戸口に立っている Larry O'Rourke に“*For England...*”と怒鳴るところがある (225.17)。この O'Rourke は、この本の第 4 挿話で豚の腎臓を買いに出た Bloom が、筋向いの M'Auley の酒場とは比べものにならないくらい“Good house”だと考えた、地下室に格子窓が嵌められた Upper Dorset street の酒場の主人 (57.40) であることを覚えている読者なら、彼がどんな努力と手段で身代を築いたかも知っていよう。彼のはげ頭は第 11 挿話で Blazes Boylan が Eccles street に Molly Bloom を訪ねる時、“By Larry O'Rourke's, by Larry, bold Larry O'” (281.38) と“janntingcar” (263.41) のリズムが付けられる。そして最後に O'Rourke の店は Molly の夜の長話に現われる (750.34)。断章 9 で Lenehan が M'Coy に時刻を尋ねると M'Coy は“Marcus Tertius Moses' somber office”を覗きこんでから“O'Neill's clock”を見て“After three”という (233.14)。Marcus Tertius Moses は“Dancer Moses”という娘がいる茶商 (30 Essex street East and 14 Eustace street) であることが第 15 挿話で分かる。O'Neill's の方は *Dubliners* の“Counterparts”に出てくる茶酒類販売人 J. J. O'Neill の酒場で、茶商 Moses の隣に店を張っている。彼は Corny Kelleher が勤めている葬儀社 H. J. O'Neill (North

Strand road) とは関係がない。

忘れっぽいのが特徴である小説の読者が Joyce の作品のすべてを記憶していることは不可能である。やがてわれわれは *Thom's Directory* か Clive Hart と Leo Knuth が用意してくれた *A Topographical Guide to James Joyce's Ulysses* を手にし、ダブリンの地図を広げて “Wandering Rocks” の冒険に取りかかるようになる。しかしこの陰険な迷路には Clive Hart があげている “trap” がいくつもある<sup>5)</sup>。M'Coy が一つ取り除いてくれたバナナの皮 (233.18) に足を取られないように、袋小路につかまらないように Jason と同じ慎重さを持って進まねばならない。

まずすぐ気づくつまずきの石は、すでに触れたように、この章には同名者や同じ名の場所が非常に沢山あることだ。Lady Maxwell が住む Dignam's court (220.28) は Dignam 家がある市の南東部とは比較にならないほど裕福な地区にある。いまは倉庫になっている Mary's Abbey (230.15) で、会話をしていた Lambert と O'Molloy はのろのろと Mary's Abbey 道路 (231.18) に出てくる。ダブリン市長 Van Dillon (234.5) は Dillon 競売所 (237.6) を副業としていない。落ぶれた船具商 Ben Dollard と赤屋根の大きな印刷工場主 Dollard (252.39) とは別人である。ハイバニア銀行頭取 John Mulligan (240.7) と “Buck” のあだ名がある Stephen の友人 Malachi Roland St John Mulligan とは無関係であるし、歯科医 Bloom (250.14) と Leopold Bloom とは面識がないことは断わるまでもない。“the reverend Nicholas Dudley C.C. of saint Agatha's church, north William street” (222.2) とアイルランド総督 the Earl of Dudley とはなんの関係もない。質商 M. E. White 夫人の店の前で、Dudley 伯の騎馬行列にも気づかずに考え込んでいる弁護士 Dudley White の当惑は、この章の読者の当惑に似ている。

Mr Dudley White, B. L., M. A., ... stood... stroking his nose with his forefinger, undecided whether he should arrive at Phibsborough

5) Clive Hart, “Wandering Rocks”, Clive Hart and David Hayman (ed.), *James Joyce's Ulysses* (Berkeley, 1974), pp. 197-216.

more quickly by a triple change of tram or by hailing a car or on foot through Smithfield, Constitution hill and Broadstone terminus.

(252. 15)

彼の当惑は、目的地の Phibsborough まで直線距離で 2,000 m ほどの市の中心部に兵營、精神病院、家畜市場、陸軍病院が立ちはだかっているからである。

同名異人あるいは異物があるかと思うと、同じ物や人が様々に言いかえ、言い直されている。Carlisle bridge (240. 8) と O'Connell bridge (235. 34) とは Liffey 河にかかる同じ橋であり、Dan Lowry's music hall (232. 37) はもと Empire music hall (233. 1) と呼ばれていた。Mary's Abbey の "council chamber" (230. 15) と "the old Chapterhouse" (245. 8) とは同じ室である。この種の方法は、この章の最後の部分で騎馬行列を見る多くの市民がアイルランド総督を様々な肩書で呼ぶ時、クライマックに達する。老婦人は "King's windows" の踏み石で "the representative of His Majesty" (252. 26) に信じきったように笑いかける、Gerty MacDowell は "the lord and lady lieutenant" (253. 3) が来たと思う、John Wyse Nolan は Kavanagh 酒場の戸の隠で "the lord lieutenant general and general governor of Ireland" を冷たく笑う (253. 8)、海岸からやってきた二人の産婆は "the lord mayor and lady mayoress without his golden chain" (254. 41) だとびっくりする。

このような呼称の二重性は当然だじゃれのもとになるが、この挿話の最初で Conmee 神父が Dignam の名前で見事な神学的だじゃれを披露している。"What was that boy's name again? Dignam, yes. *Vere dignum et justum est.*" (219. 4) Glencree 感化院での大宴会の帰路、Molly の "the milky way" にはまりこんだため息まじりに話をする Lenehan は、彼らしい卑猥なだじゃれを飛ばす。"Coming home it was a gorgeous winter's night on the Featherbed Mountain." (234. 24) 「羽根布団の山」というのは、実はこの感化院の近くにある山のことである。Conmee 神父が "pillarbox" (220. 12) を指し

て、手紙ごとあいつに落ち込んで駄目だと Lynam 少年にいうものは、鮮かな赤色に塗られた “letterbox” (220. 22) である。Simon Dedalus が騎馬行列の音を聞いてあわてて飛び出してくる “greenhouse” (252. 32) は glasshouse (温室) の間違いではなく、公衆便所である。

更にわれわれの位置を混乱させるのはダブリンの歴史にかかわるものだ。Conmee 神父が電車の中から目にとめた “Ivy church” (222. 12) は、かつてこの教会堂の壁一面につたが這っていたので現在もこう呼ばれている North Strand Episcopal Church である。Tom Rochford と Nosey Flynn が騎馬行列が近づくのをしている “Dame gate” (253. 13) は Dame street の西端にあった昔の市城の門のことで、Bloomsday にはすでに跡形もなくなっていた。St Mary's Abbey の会議室を出た Hugh C. Love 師の目的地 “the Tholsel” (245. 11) は、1809 年に解体されるまで Christchurch Place にあった古い Guildhall のことである。新しい市役所が Royal Exchange に建られた後も市の行政府を昔の名前で呼ぶ習慣が残っていたようであるが、Geraldine 家の伝記を書こうとしている Love 師は、市役所に出かけたのではなく、彼の歴史研究の一環として更に史跡調査の足を広げたのである。

Joyce は記憶を資料で確かめながら彼のダブリンを丹念に構築した。われわれが道に迷い途方にくれるのはこの町の地理と歴史に不案内だったからである。しかしより細かく見ると、Joyce の小説と事実との間には小さな相違が無数にある。芸術形式の要求を考えるなら、これらの相違はいわば当然といえる。しかし M. Adams が詳細に立証しているように<sup>6)</sup>、Joyce の自然主義の事実の処理はかならずしも芸術的な意図という一点で統一することは不可能である。個人的な意趣返しのために事実を歪める場合もあったし、単なる記憶違いや、資料の読み違いも少なくない。この章に関して Clive Hart があげている “errors” の多くは<sup>7)</sup>、作品を理解するために直接助けにならないものもある。例えば、MacConnell の店 (225. 15) が Dorset 街と Eccles 街との角にある

6) Robert Martin Adams, *Surface and Symbol: The Consistency of James Joyce's Ulysses* (New York, 1969).

7) Hart and Hayman, pp. 196-199.

うと角から二軒目であろうと、われわれはこの本を持って彼の薬局に風邪薬を買いに行くわけではないのだから、どうでもよいことだ。

しかし次にあげる三つの地理上の事実と虚構との差は、教えられなければ Joyce の意図を見落してしまう、重要なものである。断章6で Stephen と Artifoni との会話の間に、“the stern stone hand of Grattan, bidding halt” (228. 29) と町の風景が一コマ嵌まっている。銅像が石の手を上げるのはおかしい。しかしこれは客観的描写というより、Stephen の心理的反映であって、彼の行きづまりだけでなく、才能の浪費を諷める Artifoni の心情のこもった忠告の象徴となっている。最後の部分で市の南東部へやってきた騎馬行列が北東部にある “Royal Canal” (254. 37) を渡るのには、堪忍強いダブリン市民でも柳眉をさかだてることだろう。この Grand canal との取り違えはなんらかの意図なしにできるものでない。これは総督の騎馬行列を伝える新聞調の記事が無記名の客観性を装いながらいかに信ずるに足りないかを示めす、Joyce 一流の方法である。この皇室ひいきの記者は、ヴィクトリア女王が1849年にアイルランドに来た時、Northumberland と Landsdowne 通りの角の家の庭を訪ねたことにして (255. 4), Dudley 伯の行列に花を持たせている。この行列がリフィー河の南岸を通る時、“From its sluice in Wood quay wall under Tom Devan’s office Poddle river hung out in fealty a tongue of liquid sewage.” (252. 27) と書かれている。このどぶ川が Wood quay ではなく、行列が渡った橋の東側 Wellington quay にあって、総督一行には見えないことを Joyce は手紙で確かめていた。総督閣下の威風堂堂の騎馬行列にどぶ川が忠実にアカンペーをしているのは実におもしろい。しかしこの “tongue” がポドル河の水量を浄水場とリフィー河とに分ける構築物であったことを、Joyce はしっていたらうか<sup>8)</sup>。

このような地理上の traps を取り除けば、われわれはこの挿話に登場するすべての人物の位置をはっきりとダブリンの地図の上につきとめることができる。“Wandering Rocks” には実に多くのことが同時に起き多元的に語られて

8) Adams, pp. 198-199.



いるにもかかわらず、時間的前後関係は“Cyclops”や“Ithaca”のように混乱していない。客観的時間を計る便法、Conmee 神父の内ポケットの中の時計や“Micky Anderson’s all times ticking watches” (253.10) は絶え間なく時を刻む。Stephen でさえ彼の外で永遠に動悸する全宇宙的な時間の流れを無視することができず、Hamlet をまねてそれと一時的な和睦を結ぶ。“Yes, quite true. Very large and wonderful and keeps famous time. You say right, sir. A Monday morning, ’twas so, indeed.” (242.19) このあらゆるものを押し流し均一に進行する時間は、この挿話で“Elijah is coming”のチラシを浮かべて流れるリフィー河によって象徴されている。この章の人物の中には Denis Maginni のように活発に歩く者、同じ所をぐるぐる回っている者、あるいはほとんど動かない者もいる。それにもかかわらず“Wandering Rocks”を流れる時間の内的順序が狂うことはない。Joyce は彼の人物が所定の距離を移動するのに要する時間を正確に計算して、そのあとを赤鉛筆でダブリン市の地図の上に印したと伝えられているが<sup>9)</sup>、Clive Hart は主として場面間の同時性を示すこの章の挿入文をたよりに、ここに登場するほとんどすべての人物の時間、空間的關係を分きざみで再現してみせた<sup>10)</sup>。Joyce がこれほどまでに正確をきしたのは、前半の展開が終り後半の技術的な冒険に乗り出す前に、中心人物の意識を堅固たる基盤にすえておきたからだろう。

“Wandering Rocks”の技法は Stuart Gilbert 以来<sup>11)</sup>、“labyrinth”ということばに眩惑されてこの章を構成する 19 のばらばらな場面を連鎖する機械的手段のみを注目し、それがアイロニーの方法であることは Marilyn French まで見のがされてきた<sup>12)</sup>。二つの場面を同時に併置すると不安定なアイロニーを生むのはわれわれがよく観察するところだ。この章の場面はどれも始まりも終りもない断片であるが、すべてある主題的な内容を持っている。このような場

9) Budgen, p. 122.

10) Hart and Hayman, p. 215.

11) Stuart Gilbert, *James Joyce's Ulysses: A Study* (New York, 1959), pp. 227-239.

12) Marilyn French, *The Book as World: James Joyce's Ulysses* (Cambridge, Mass., 1976), p. 118.

面はそれと併置される周辺の素材と容易に重なりあい、あいまいな光を投射しあう。このような不安定な場で語句は一様に解釈できなくなる。Clive Hart がいつているように冒頭の語 “superior” (219. 1) は名詞でもあり形容詞でもある<sup>13)</sup>。それは Conmee の尊称であるとともに、彼の優越感をあらわし、彼の散歩の出发点である地図の上すなわち北を示している。“No more young” は老婦人の修飾語となる時 (236. 30)；まぎれもなく記述的であるが、Bloom に使われると彼の情欲をあざ笑う語になる。話者の発声上の変化はこの章の最初と最後の場面に幾重ものアイロニーを漂わせている。しかし、一見全く無関係に見える場面間の挿入ほど単純で陰險なアイロニーの方法はない。それは登場人物が意識しない時間、空間的な関係をわれわれに知らしめるばかりでなく、道徳的関係をもきわだてる。どんな時どんな所にでもいるこの章の話者は挿入によって皮肉な注釈を場面につけるのである。当面の文脈に直接関係のない他の場面から抜き出した語句の挿入によって、われわれの読書体験は絶えず分断され、次第にこの章を対位法的あるいは空間的に読むようになる。われわれ読者は視野の急激な拡大と縮小によって、ダブリンを俯瞰的に見る位置に押しあげられる。われわれは人々の会話に耳をすましその喜怒哀楽に共感すると同時に、それを市全体のパースペクティブから判断することを要求されているのだ。この章の話者はすべてを見せているが、なにも語らない。しかしこの饒舌な形式が示す “communal death” と Hugh Kenner がいったものを認識しそんじるなら<sup>14)</sup>，“Wandering Rocks” はダブリンの表面的な事実の羅列とこの小説の影のような脇役たちの退屈な展覧会場になってしまう。

最初の断章は温厚な神父の威厳をこれほど率直に再現したものはないと思わせるような文で書かれている。

The superior, the very reverend John Conmee S. J., reset his smooth watch in his interior pocket as he came down the presbytery steps. Five to three. Just nice time to walk to Artane. What was

13) Hart and Hayman, p. 190.

14) Hugh Kenner, *Dublin's Joyce* (London, 1955), p. 253.

that boy's name again? Dignam, yes. *Vere dignum et justum est.*  
 Brother Swan was the person to see. Mr Cunningham's letter.  
 Yes. Oblige him, if possible. Good practical catholic: useful at  
 mission time. (219.1)

しかし、このなめらかな心地よい調子は、尊称が二つもつく自分の權威に満足しきっている者の優越感を表わすもので、彼の親切は思着せがましく不快である。もともと親を失った子供のことなど Conmee の眼中にない、名前すら度忘れしている。思い出した時はそれをだじゃれの材料にする。この子供のことで孤児院を訪ねるのは、役に立つ人にたのまれたからであって、個人的慈悲のこととなるとすぐに底をついてしまう。Conmee は財布にシリング銀貨一枚しか入っていないのを知っているのに、一本足の水兵に “in the sun” で祝福を与えただけで通りすぎる。Conmee の柔和や寛大は理解と同情にもとづくものではなく、不快の回避にもとづいている。彼は他人の苦しみに気づくが忘れるのも早い。彼は戦争で傷き、貧民収容所で生涯を閉じる者たちのことを考えるが、“not for long” だと皮肉な話者が注釈を加えている。そして Conmee は Wolsey の有名なことばを平然と思い出して彼の感想をしめくくる。遊覧船が爆発して多数の死傷者が出て、Conmee から引き出せる同情はしれたものである。“In America those things were continually happening. Unfortunate people to die like that, unprepared. Still, an act of perfect contrition.” (221.21) 彼は神の摂理を信ずるが、それは貧乏人が泥炭をたくのを許す摂理である。

彼は現実を直視することができない。すべてを感傷でおおい、快樂、礼節、名譽が守られていた過去にのがれる。Malahide road を歩きながら、Conmee は Lord Talbot de Malahide を思い出し、楽しい城下町の時代にあこがれる。

Don John Conmee walked and moved in times of yore ... he smiled at smiling noble faces in a beeswaxed drawingroom, ceiled with full fruit clusters. And the hands of a bride and of a bridegroom, noble to noble, were impalmed by don John Conmee. (223.38)

ふんだんに微笑をふりまくお人よしの “Don John Conmee” に畑のキャベツまでも膝を折っておじぎをする。

Marilyn French がいうように Conmee は審美的な俗物である。彼は審美感から醜悪なものや、不様なもの、難儀もの、つまり貧困、不調和、罪といったものを見たり触れたりすることを嫌う。Vaughan 神父の “droll eyes and corkney voice” (219. 42) が気に喰わないのに “A wonderful man really” というのは、ウェルズの旧家の出だからである。Mrs M’Guinness が質屋をやっているのを信じることができない。あんな “queenly mien” をしているのだから。彼は “cheerful decorum” (222. 16) を好むが “Mud Island” のむさくるしい路を歩いてゆくのはまっぴらである。彼の精神性は常に世俗的な関心とおきかえられる。聖務日課は Lady Maxwell の訪問で後まわしにされていた。この断章の最後に草やぶから現われる若い男女 (Lynch と Kitty) に厳粛な態度で祝福を与えながら Conmee が読んでいる第五時の祈りのヘブライ語の見出しは、彼の善人振りを痛烈に皮肉っている。“*Sin: Principes persecuti sunt me gratis: et a verbis tuis formidavit cor meum.*” (224. 31)

Conmee のダンディズムに最初の断章の挿入者 Denis Maginni が色彩をそえる。Conmee の上べだけの親切心とこのダンスその他の教師のはでな服装，“silk hat, slate frockcoat with silk facings, white kerchief tie, tight lavender trousers, canary gloves and pointed patent boots” (220. 24) が好一對をなしている。Conmee が Lady Maxwell のために第五時の祈りを犠牲にしたように、Maginni はこの貴婦人のためにうやうやしく道を譲る。彼等が住む裕福な “Dignam’s court” (220. 28) は、所詮、Dignam 一家が住むダブリンの南東部の貧民街とはかかわりのない地域なのだ。

教会の代理である Conmee が最初の断章でダブリンの北東に向うのに対し、国家の代理であるアイルランド総督は最後の断章で市の南東へ向う。Conmee が一人で悠然と歩いてゆき、多くの市民の敬礼を受けるのとは対称的に、総督は従者にかこまれ、群集の中を馬車で通りすぎてゆく。Conmee は Dignam の子供を救うために外出し、総督はマーサ病院の基金援助のために Dignam の

家の近所にゆく途中である。二人は対称をなし、ダブリンの二種類の権威を代表しているのは明白である。彼等の役割に皮肉な類似性がある。教会の代理である Conmee に真の謙虚を欠き、儀式張って行列を組んでいく総督閣下が William Humble と呼ばれているのを見るだけでその風刺が読み取れよう。教会も国家もともどもになにかが決定的に欠けている。その欠如が市民たちを孤立させ、醜悪にするのだ。

Conmee に次ぐ場面で Corny Kelleher の棺蓋が述べられた後で、教会と死と Corny の金勘定とを結びつけるように Conmee が挿入される。Corny と警官が話している内容は不明であるが腐敗の臭いがするのは確かだ。Bloom は “Corny Kelleher he has Harvey Duff in his eye” (163.18) といって、Corny が警察のスパイであることを暗示していたが、それを確認するかのように彼等の会話の間に硬貨が投げ入れられる。

場面3の一本足を見せびらかし物ごいをして歩く水兵は不快であるが、Dedalus 家の娘たちが通りかかった時に発せられる “home and beauty” (225.23) は、別種の物ごいをしている O'Molloy の挿入と同じように痛烈な皮肉である。醜悪なこじき水兵に続いて、施しの豆で飢をしのいでいる Dedalus 家の娘たちのむごい場面が併置されている。この場面には Conmee と “laquey” の振鈴によって Simon Dedalus の挿入があるが、神父が過去に逃避していたように、“Our father who art not in heaven” (227.3) は酒に逃避して現実を顧みようとしない。もう一つの挿入、丸められた “Elijah is coming” のチャンは希望のなさを増加させる。予言者が現われ聖書にあるように、子の心を父に、父の心を子にもどす時があるのだろうか。

Blazes Boylan が Molly に贈物を選ぶ場面に妻のために本を選ぶ Bloom のうしろ姿が挿入される。共通項は性的代償である。Boylan は手近な対象を女店員に発見する。“A young pullet” (228.1) が、この日われわれが聞く Boylan の唯一の思考である。性欲の戯画である彼はこれ以外のことばで意見を表わすことができない。それに女店員の観察、“got up regardless, with his tie a bit crooked” (228.4) が対置される。彼女は Boylan のずうずうしさに

顔を赤らめながらも、その観察を精一杯心の中で表わしていた。征服者気取りの Boylan は結局、彼女にそして Molly に物笑いの種にされるのだ。

Stephen Dedalus が現われる次の断章につづいて Miss Dunne の出番になる。彼女の世界には現実感が全然ない。彼女はタイプライター、衣裳、三文小説、“fellow”そして1904年の性の女神 Marie Kendall のポスターにかこまれて生きている。この場面の挿入は Rochford の新案演目表示器と Hely 商会のサンドウィッチマンであるが、それらは彼女の世界の構成物と同じくらい機械的で人工的である。Boylan の秘書である彼女は Bloom がひそかに文通をしている Martha Clifford であるらしい。彼女は読みさしの小説を机の引き出しの奥にしまって、“Is he in love with that one, Marion?” (229.13) と考える。Marion は Molly のファストネームである。彼女の“he”は Molly の独白のそれのようにまぎらわしい。

Lambert と Love そして O'Molloy が登場する場面8は、細かなパターンを積み重ねてアイルランドの現状の冷酷な批判になっている。英国人の牧師 Hugh C. Love は Geraldine の反乱について書物を書いているらしく、Lambert にともなわれて St Mary's Abbey の史跡を見せてもらっている。ここで若き騎士は1534年にイギリス王ヘンリー III 世に対する謀叛を宣言した。Love が Geraldine を研究の対象にしたのは興味深い。なぜなら、この一族は土着のケルト人ではなく征服者として渡来し、ケルトの豪族との婚姻によってアイルランド化するようになり、やがてイギリス王家に反感をいただくようになったアングロ・ノルマンの貴族であるからだ。Lambert によって“the most historic spot in all Dublin” (230.16) と呼ばれるこの寺院が、現在アイルランド人によって倉庫として用いられているのは皮肉を二重にする。更にこの歴史家が墮落神父 Bob Cowly の家を差し押えている家主であることがわかる時、それは三重になる。

Joyce が細かく作りあげたパターンは、アイルランドの土地をがんじがらめにした英国人地主に対する反発が19世紀の土地解放運動の引き金になったことを示している。そしてその挫折はこの場面の挿入者 H. J. Parnell によって

表わされている。兄 Charles Stewart Parnell の亡霊 (“pouched eyes on ghost” 165. 11) は、国語問題が討議されている市議会を抜け出し、D. B. C. でチエスを差している。断章16で Mulligan はそれを目ざとく見つけて英国人 Haines に売りつける。Joyce は “Circe” 挿話の黒ミサで、このアイルランド民話の収集家と Hugh C. Love を一つにして “the Reverend Mr Hugh C. Haines Love M. A.” (599. 16) を作っている。Haines はフランス語で憎悪を意味し、Love と対立する。St Mary’s Abbey の場面にスカートから小枝を取る Kitty の挿入があるのもおかしくない。Kitty と Lynch は愛していたのだから。こうしてアイルランドの経済をまかなう穀物倉庫で政治と性 (Parnell の亡霊と Kitty O’Shea の身代り) が会合することになる。Lambert がすぎ間風がもとで風邪をひいているようにアイルランドの政治も経済もイギリスに侵されて病んでいる。O’Molloy も借金の申し出が失敗することをうすうす感じている。

次の場面は無為に日をおくるダブリン市民の痛烈な告発である。かつて下水溝から人を救った英雄 Tom Rochford は芝居の演目を自動的に表示するスポット付き機械を実演してひまをつぶしている。4時にオーモンドホテルで Boylan と会う予定の Lenehan は M’Coy と無駄話をして時間をつぶしている。彼等の行動はこの章の登場人物の中で最も無目的でのろい。Tom と Nosey Flynn は次にわれわれが見る時、Crampton court から少し離れた Dame gate にいる。Lenehan と M’Coy とは同じ界限を行ったり来たりしているにすぎない。この場面の挿入者も同じようにひまつぶしをしている者ばかりだ。老婦人は裁判を三つ傍聴し、死までの退屈な時間をつぶしている。いつまでもおしゃべりをして溜息をついている居間の客にうんざりして使いを買って出た Dignam 少年は、できれば家に帰りたくなかった。総督の騎馬行列がこの断章から始まるのだが、彼の目的も一種の気ばらしにすぎない。

Stephen はこの章で Bloom の前後に等間隔をおいて二度あらわれて、その窮状をわれわれの前にさらす。最初の場面で Artifoni は文学の理想に殉じようとしている Stephen に、もう一度音楽をやる気にならないかと優しいこと

ばをかける。しかし観光客の “stunted forms” (228.18) や “stern stone hand” をあげて止まれを命じる Grattan の銅像におしひがれている Stephen は、昔の教師に礼をいうのが精一杯である。次の場面で彼は時間の中の地獄を見る。奇形と罪、醜悪な性と耳に毒を盛る文学のイメージ、ほこりがへばりついた宝石。彼の術学趣味を嘲笑するように、“Orient and immortal wheat standing from everlasting to everlasting” (242.5) という独白の後に朝海岸に現われた二人の産婆がわれわれのために挿入される。発電所のそばを通りながら、Stephen はまたしても物質と精神との二者択一を思う。執行猶予は苦悩の延期でしかない。女の愛を得る呪文は、挿入者 Conmee の祈りが Kitty を出現させたように、Dilly を呼び出し、この本で最も悲惨な場面へと発展する。Dilly は父からせびった金でパンの代りにフランス語の独習書を買っていた。

He took the coverless book from her hand. Chardenal's French primer.

—What did you buy that for? he asked. To learn French?

She nodded, reddening and closing tight her lips.

Show no surprise. Quite natural.

—Here, Stephen said. It's all right. Mind Maggy doesn't pawn it on you. I suppose all my books are gone.

—Some, Dilly said. We had to.

She is drowning. Agenbite. Save her. Agenbite. All against us. She will drown me with her, eyes and hair. Lank coils of seaweed hair around me, my heart, my soul. Salt green death.

We.

Agenbite of inwit. Inwit's agenbite.

Misery! Misery! (243.19)

*Ulysses* の中心の章の中心の場面でわれわれの主人公 Leopold Bloom は乱れる息をおさえながらポルノ小説のページをめくっている。Molly のために本を選んでいる彼は妻と Boylan との密会の時刻が差し迫ったのをいやというほ



ど意識している。ひと時もはなれることのない猜疑を忘れるためにどぎつい刺激に身をまかせようとして、彼は自分の性欲に追いかけられる。人間関係のわずらわしさに比べれば都会の物理的な現実が Bloom にとって安住の場である。彼はいま町に背を向けて自分自身と対面している。この場面での Bloom は玉葱くさい息で “That’s a good one” (237.5) といって *Sweets of Sin* を差し出す借本屋の主人と変るところがない。そして派手な身なりの Maginni と “an elderly female, no more young” (236.29) との挿入は合わせ鏡で見た女性的で自虐的な Bloom の姿である。しかし彼は M’Coy がいうように “a cultured allroundman” でもある。“He’s not one of your common or garden ... you know ... There’s a touch of the artist about old Bloom.” (235.15)

Simon と Dilly がくりひろげる父子の地獄絵巻と Stephen と Dilly との胸を搔きむしるような出会いとの間に、断片的なこの章の中で最も関連性に乏しい Tom Kernan の場面がはさまれている。Kernan は Bloom の分身であるとよくいわれる。実際、仕事上のやりとりを心の中で反芻するくせ、遊覧船の犠牲者に対する同情、生半可な歴史上の知識、下世話通なところなどこの断章での Kernan の独白は Bloom のそれとよく似ている。しかし Bloom は Kernan のように服装を自慢するところがないし、また金銭や権力を崇拜しない。Bloom の分身はむしろ、この場面の挿入者 Denis Breen に近い。Breen は U. P. と書かれた匿名の葉書の差出人を名誉棄損で訴えるといつて町を歩きまわっている。気が狂い、物笑いの種にされている人生の敗残者 Breen は、ユダヤ人の寝取られ男 Bloom の内的恐怖を客観化したものだ。Breen に同情する Bloom は “Cyclops” 挿話で “Half and half ... A fellow that’s neither fish nor flesh” (321.11) と罵られる。しかしこの場違いの愛の殉教者が Elijah に見えてくるのもそのような時である。この断章にも Elijah の挿入がある。

Simon とその仲間たちは生活の不安 (Hugh C. Love の挿入で示される) を酒と歌とでまぎらそうとしている。逃避の方法を見出すのに失敗した者は挿入者 Farrell のように気が狂う。Bloom が彼の狂気を Breen に見ているとしたら、Stephen は図書館の章で彼の狂気をあの “constant reader”, 長ったらし

い名前を飾り書きにする Cashell Boyle O'Conner Fitzmaurice Tisdall Farrell に見ている。Hamlet の立場に立って Shakespeare を論じた後だけに、Farrell の登場は不吉である。“Item: was Hamlet mad?” (215.14) と Stephen は自問していた。この場面以降、Stephen の分身がなん人も登場してアイロニーを倍加する。断章16で Mulligan と Haines が Stephen のうわさをし、“Shakespeare is the happy hunting ground of all minds that have lost their ballance” (248.36) というと、肉体の平衡を失った “wandering Aengus” である一本足の水兵が挿入され、“*England expects*” とうなりながら Nelson street に消えていく。こつこつと枕を叩きながら歩く盲目の調律師も、とねりこのステッキを持ち歩く弱視の Stephen の一面を表わしているが、断章17でこの少年と Farrell とがぶつかるのを見守るように Artifoni が先導してゆく。父を失い母を疎んずる Dignam 少年も、母を失い父を疎んずる Stephen の分身である。

断章15で Cunningham 一行が Dignam の遺族のために奔走している。Bloom が5シリング寄附したことが披露される。Jimmy Henry は足のたこにかこつけて寄附の申し出をごまかす。副執行官は Paddy のことを覚えていない。Boylan とオーモンドホテルの女給たち “Bronze by Gold” (246.7) の挿入があるが、Bloom と Boylan のどちらが Gold かは読者が決めることだ。最後から二番目の断章でわれわれは Dignam 少年の独白を聞く。彼は母をだましてボクシングの試合を見にゆこうと考えるが、試合はすでに終わっているのに気づく。彼の落胆は “Araby” の少年のそれに似ている。彼は父の死を理解していない。父が死にぎわにいった “the other things” (251.43) は聞えなかった。この子が尊敬しているのは “Myler Keogh, Dublin's pet lamb” (250.33) と “toff” Boylan である。こんな世界を相手に Martin Cunningham は “the youngster will be all right” (246.1) といって彼の仲間を安心させるのである。

最後の部分はその文体だけでなく区々とした出来事の羅列によってアイロニーの変奏曲を作っている。この部分を統一しているのはアイルランド総督に送

られる市民の極めてねんごろな挨拶であるが、それはまったく眉つばものである。最初の Tom Kernan の敬礼は見のがされてしまう。第二番目のものは事実上挨拶ではない。ねんごろな挨拶はこの作品に二度と現われない法廷弁護士 Mr Dudley White を入念に描写するあまり忘れられている。皇帝陛下の名代を信じきって笑う老婦人のもうろくは、“King’s windows” (252. 26) をフィニックスパークの総督邸の窓と混同する程度であるが、読者も一瞬同じ過ちを犯しそうになる。この King は Upper Ormond quay の印刷屋である。老婦人の笑いも Richie Goulding の驚きも、またオーモンドホテルの女給の賞賛の眼差しも正しくは敬礼とはいえない。公衆便所から飛び出してきた Simon Dedalus が道路の真中で帽子を下げたのは、総督に敬意を払うのが目的だったのだろうか。

市民のあやふやな敬礼が更に続く。“From Cahill’s corner the reverend Hugh C. Love, M. A., made obeisance unperceived...” (252. 37) Love の行動は不確実なものが多いこの章の中でも最も不確実である。断章 14 でわれわれが Love を見るとき、彼は Mary’s Abbey を出て Capel street を南下し “the Tholsel” へ向ったと教えられる。いま彼は Mary’s Abbey から少し東、Timothy Cahill の酒場がある Lower Liffey street と Lott との角にいる。そこからでは Grattan bridge にさしかかった騎馬行列の音が町の騒音にまじってかすかに聞えたとしても、見えるはずがない。3 ブロック、直線距離でも 600 m は離れているのだから。Geraldine 家の歴史に夢中になっている Love が頭を下げたのは Dudley 伯ではなく、“lords deputies whose hands benignant had held of yore rich advowsons” (252. 38) に対してである。

Grattan bridge で右左に別れる Lenehan と M’Coy は騎馬行列を見たが敬礼はしなかった。Gerty MacDowell は “Her Excellency” の衣裳を見たかったが、Spring 商会の大型家具運搬車にさえぎられて見ることができなかった。John Wyse Nolan は Kavanagh 酒場の戸に隠れ “lord lieutenant general and general governor of Ireland” へ冷たい笑いを送る。D. B. C. の喫茶室の窓から Buck Malligan は “gaily” に Haines は “gravely” に騎馬行列を見下ろ

している時、John Howard Parnell の眼はチェス盤を凝視していた。Tom Rochford は Lady Dudley の視線を感じ、赤いチョッキのポケットにつっこんでいた拇指を抜き出して、帽子を取ったが、Blazes Boylan は上着のポケットに手を入れたまま赤い花を口にくわえて三人の貴婦人を見送っていた。

先導の馬車に危うく引かれそうになった Breen はあわてて敬礼をするが、相手を間違える。彼は U. P. と書かれた差出し人不明の葉書的一件で午前中に John Henry Menton に面会に行ったが、Dignam の葬儀のあと Menton は彼の事務所に帰らなかったらしい。3時半ころわれわれが Breen 夫婦を O'Connell bridge で見る時、彼は Menton の事務所で一時間待ったと告げられる。その間に Menton は Bodegh 食堂でゆっくりと昼食を取り、Ben Dollard と世間話をしていた。それから10分ほどして馬車に引かれそうになる時、Breen は Menton が立っている商業会館のすぐそばにいる。結局、彼は相談手を求めて Collis and Ward 法律事務所へ向うが、その途中 Tom Rochford に副執行官事務所に行けといわれ、そこで門前振いを喰って、Green street に“G. man” (299. 20) を訪ねることになる。

ダブリン市を西から南東へと横切っていく騎馬行列が前半に出会う市民の多くは立停っているのであるが、市の中心から郊外へと向う後半は皮肉な取り合わせの人物がその後を追ってゆく。Grafton street を往復している Hely 商会のサンドイッチマン、派手な身なりの Maginni、馬車の鼻先を大股で歩いてゆく Farrell は Clare street の角までくると方向転換して同じ道を引き返してゆく。Farrell にぶつけられて“you bitch's bastard!” (250. 19) と見事な悪態をつく盲目の調律師は枕をつきながら行列の後についてゆくが、やがてオーモンドホテルに置き忘れた音叉を思い出して引き返してくることになる。Dignam 少年と Artiforni は二人とも電車に乗り遅れ、騎馬行列の後を徒歩でついてゆき、彼らの家の戸がその一日の行動をとじることになろう。

どうやら総督の行列を忠実に見送ったのは汚水の舌をたらずポドル河と、威儀を正した Henry and James 洋服店のろう人形、そして厚化粧をしてスカートの手をつまみあげている“a charming *soubrette*, great Marie Kendall” と

厚ぼたい口でにんまり笑って歓迎の意を表している Mr Eugene Stratton のポスターであったようだ。

Joyce が丹念に作った迷路は、これ以上期待できないほど精密かつ具体的な都市の縮図である。日常的な群居性のざわめきがある。道路は交差し、商店は広告を出し、家々は軒を連ねる。それなのに人々のあいだに真の接触がない。この章が断片の集積であるように、登場人物はみな孤立した島である。挿入句は場面間の同時性を成立させるが、その効果は結合の強化ではなく、Marilyn French がいうように、いつわりの人間関係にしのびよる黒い影である<sup>15)</sup>。市民生活に形式を与え統一すべき宗教と政治がいかにも無力で形骸化した権威であるかは、この章の最初と最後をしめくくる Conmee 神父と Dudley 伯とによって痛烈に示めされている。“Wandering Rocks” がわれわれにつきつけているものは、*Dubliners* のそれと同じ腐敗と無気力、そして孤独である。それが Stephen のような芸術家を追放者にし、Bloom のような市民を放浪者にしたのだ。彼等に話し合うものがあるだろうか？ この章以降、夜が深まるにつれて、彼等の意識はますます陰影を濃くしていき、Joyce の技法も奔放かつ複雑になっていく。この章の堅固な空間的現実はそのために構築しておかねばならない基礎だった。

---

15) Marilyn French, p. 123.